

馬獣医のよもやま話 ⑱ 西村信義獣医師

輸送熱は怖い

門別診療所勤務 西村 信義



「先生、何日か前に上がりが来たんだけどさあ、エサあんまり食べないで元気ないんだよね。見てくれないべか。」

「競馬場から上がってきたんでしょ。熱は何度だい？」

「計ってないよ。」

「輸送熱かもしれないから計っておいて、すぐ行くから」

こんな会話をこの春も何回か牧場の人としました。輸送熱は生産牧場の方にはなじみが少ないのかもしれませんが育成牧場や競馬場では知らない人はいないと思います。輸送熱は、長時間輸送のストレスによる免疫力の低下から感染を引き起こし発症します。到着した時にすでに発症してぐったりしていることもあります。治療が遅れてしまうと、輸送性肺炎、胸膜炎等になり、治療にかなりの時間や経費が掛かります。また胸膜炎を起こしてしまうと胸に水が溜まり、水をぬかなければならないこともあります。(右の図は胸から水を抜いたものです。すごい量です) 治療の甲斐なく予後不良になることもしばしばあります。



この時期に上がってくる上がりは繁殖シーズンに間に合わせようとレースに出走して、すぐに輸送してくることもあります。レース

という非常に体力を消耗し、ストレスも受けた状態ですぐに輸送すれば、さらにリスクは高まります。

昔獣医師になりたての頃は育成牧場で「あんちゃん、明日朝八時に馬を内地に積むから、一時間前に輸送熱の注射うってや」と言われてマイシリンを注射しに行ったものです。輸送熱の予防注射は輸送後の大腸炎を誘発するという研究もあり、競馬場ではあまり打たれていないかもしれません。一般的にマイシリン等を注射することが多いですが、作用時間は24時間程度です。輸送熱の予防として効果がないとは言えませんが、輸送熱にならないということは決してありません。

少し前には経口のインターフェロン製剤があり、輸送前にその投与行うこともありましたが、現在はその薬剤が入手できなくなっています。

輸送熱の予防としてはその馬の状態をしっかりと考えてやるのが重要です。それでも輸送熱は起こると考え、長距離を輸送してきた馬は最低でも1週間程度体温を測ってやるようにしてください。早期発見早期治療が大切です。

また、競馬場や育成場から上がってきた馬では到着後便秘症になりやすいです。急に運動量が減少することが考えられます。ポロの量や状態には注意してください。ポロが少ない、固い時には飼葉に水を足す、ふすまや塩を多めにやる。整腸剤などを投与するといった処置が必要です。それでも良くならなければ獣医師に相談してください。

内地からの輸送は環境の変化もあり馬にとってかなりのストレスです。牧場の方は輸送してきた馬には特に注意して病気の早期発見早期治療に努めましょう。